

令和6年能登半島地震で新潟医療福祉大・横山豊治教授ルポ

「新潟より、みなさまへ」

みんつど号外です。読んでください

揺れる遺影、津波警報の恐怖

『みんつど』編集部 天
地成行様

新潟より

14階建ての5階。86歳の母が普段は一人で暮らすマンションのリビングできょうだいやいとも一緒に新年の挨拶を済ませ、ビールをつぎ合って飲み始めた。

ところが突然、各自のスマホが一斉に唸り声をあげ始め、緊急事態を知らされた。

その直後にこれまでに経験したどの地震よりも激しくて長い揺れに襲われた。

天井の照明器具がブラコンのように大きく揺れ、仏壇脇の壁に掛かっている祖父母の遺影の額が2つ並んだまま、まるでバイキングという遊園地の乗り物のように右に左と同じ周期で

何度も揺れていた。

老母は隣りの妹にしがみついて恐怖を必死にこらえていた。

私はマンションの耐震性・免震性をひたすらに信じながら、近隣の高層マンションを窓から見渡し、揺れが収まるのを待った。

幸いなことに、我が家では棚から物が落ちることはなく、水道・電気・ガスも普通に使えたが、テレビではすぐに津波の襲来に備え、かつてなく強い口調で海岸に近い住民たちに高台への避難を呼びかける女性アナウンサーの声が続り返し放送された。

「大変な元旦になった：」と思った2024年1月1日の午後4時10分頃であったが、各地の被害の全容がわかり始めたのは、もう少し後になってからで

ある。

発表の度に死者数が増えている石川県は、私が大学の卒業後最初に就職し、病院のソーシャルワーカーとしての社会人生活をスタートさせ、22歳から29歳にかけての20代7年間を過ぎた第二のふるさとであり、懐かしい地名が被災地として次々と報じられるのを聞きながら、知人らの無事を祈った。

すると、その日本海側に向けて東京・羽田空港を飛び立とうとしていた海上保安庁の飛行機と379人も乗客・乗員を乗せて着陸してきた日航機が衝突、炎上するという前代未聞の事故が起きたことを知るが、

普段はいない海保機が被災地方面に向かう必要性はこの地震の発生に起因して生じたものであるといえよう。

それから3日後。1月4

日には、私の現在の勤務先である新潟医療福祉大学は冬休み明けの授業が予定どおり始まったものの、新潟県内にもまだJRの運休区間があるため、さらに道路や宅地の液化化現象の影響などで通学ができないなどの理由により、授業への欠席を知らせる学生からのメールが次々と届き、3割程度の欠席者数に達した。

2004年に起きた中越地震からちょうど20年にあたる年の始めに、新潟県中越地方の中核市長岡でこれだけの地震に遭遇するのは――。

2024年1月1日

新潟県新潟市在住 横山豊治（新潟医療福祉大学大学院教授）